

いのちを潤す長雨の時期。
自然の恵みに感謝し、生物の歓びを感じる。
雲の後ろに隠れていた太陽が時々顔を覗かせ、
夏の遠くないことを知らせる。

やがて光溢れる季節を迎える。

ふるさとの風 水無月
夏への誘い

GOMAS ANN

世義寺 柴燈大護摩

世義寺は、外宮から程近い岡本町滝浪山に位置する名刹である。
七月七日、七夕の日に行われる「柴燈大護摩」は、千葉県さいとうおちごまの成田山、静岡の秋葉山と並ぶ日本三大護摩の一つに数えられ、千百余年の歴史を誇る。
地元では、“ごまさん”と呼ばれ親しまれており、伊勢の夏の風物詩である。
当日は、午前七時より境内に設けられた壇を囲んで護摩が七回焚かれる。
修験僧が吹くほら貝の音が鳴り響く中、住職をはじめ信徒らにより願文が唱えられ、護摩札による祈願成就と護摩木の授与が行われる。
人々の願いを込め先端を大護摩で焚かれた護摩木は、農地の虫除けや家屋の魔除けに用いられるという。
午後八時からは、密教の荒行である火渡りの行。
山伏たちが呪文を唱えながら、護摩壇の残り火の上を素足で渡る。
なお、一般人が無病息災を願い参加する火渡りは、危険防止の配慮から近年は禁止となった。
“ごまさん”の日、勢田川に架かる世義寺橋から山門までの参道には多くの屋台も並び、家内安全、五穀豊穡を祈る伊勢近郊の参詣者で大変な賑わいを見せる。

“護摩”の語源は、梵語（サンスクリット語）の“homa”で、焚くという意味。

“柴燈”とは、神仏の灯明として焚く^{しばひ}柴火とある。

護摩は火を燃やして祈るもので密教の代表的な祈禱法である。

護摩壇を設け、護摩木を焚き、息災・増益・降伏・敬愛などを本尊に祈る儀礼は、^{えんのぎょうじゃ}役行者、
或いは^{しょうぼう}聖宝の創始としているが、小正月に民間で行われる民俗行事の左義長を密教の護摩と
結びつけたとの説もある。

世義寺は、詳しくは教王山神宮寺宝金剛院と称し、古義真言宗醍醐派に属し、本尊は薬師
如来である。

天平十三年（741）聖武天皇の勅願を奉じて、僧行基が大神宮の神宮寺として^{つぎばしごう}継橋郷前山（現
前山町）の亀谷郷に建立したと伝えられる。

その後、建長年中（1249～1255）に外宮西側の坂之世古（現八日市場）に移建、寛文十年
（1670）の山田の大火から免れたが、外宮宮域に近すぎるとして山田奉行桑山丹後守の命に
より翌年の寛文十一年（1671）現在地に転じた。

最盛期には、塔頭十九ヶ寺を有し、伊勢国の中心寺院であったといわれる。

天保六年（1835）、本堂の裏山に弘法大師の石像を安置し、八十八か所巡拝としたところ参
拝者が増加、境内の雑踏問題を起こすほどになった。

外宮近辺でのこの宗教的風俗に対し、外宮・内宮の両宮は山田奉行所に対して停止を訴えた
のである。

この訴えにより、石仏を本堂に移すよう命じられた寺は、山内の石仏を取り払い、本堂の周
囲に陳列。これが原因で、巡拝が^{すた}廃れ寺の勢力は衰退していった。

やがて明治維新後の廃仏毀釈により、本来は護摩堂であった威徳院のみが残りここに本尊を
安置。無本寺から醍醐寺三宝院を本山と改め、教王山世義寺と称するようになったのである。
この威徳院は、吉野の大峰山修験道の先達寺院として威容を誇り、毎年六月七日、内宮・外
宮の法楽を始め、天下泰平、風雨順時、五穀豊穰、万民悦楽の祈禱を行っており、これが現
在まで引き継がれている。

また、南北朝時代には北畠親房より、大峰修業として飯高郡鎌田村（現在の松阪市鎌田）
五十石の寄進を受けるなど、世義寺内では最も勢力があったと伝えられる。

衰退後、歴史に残るのはこの威徳院と大正四年（1915）に設けられたインド渡来の神・歡喜
天を祀る聖天堂のみとなったが、それ以降、参道も整備され一応の復興を遂げ現在に至って
いる。

寺宝としては、まず国重要文化財、治承二年（1178）七月十二日銘の“^{とうききょうづつ}陶経筒”が挙げ
られる。

旧地の前山亀谷郷から出土、僧寛喜が教豪の供養のため埋経したと考えられる。

山門正面にある本尊の“木造薬師如坐像”は、平安前期のもの。

“木造十一面観音菩薩立像”は平安末期のもので、共に市の有形文化財に指定されている。
威徳院に安置される“木造愛染明王坐像”は、県の有形文化財である。

また、八卦や姓名判断などでも知られており、伊勢周辺の人々の暮らしとの結びつきは深い。境内裏山一帯は公園になっており、藤やつつじの名所として名高い山内からは、市街も眺めることもでき参詣者も多い。

世義寺の歴史を語る時、大神宮寺や法楽の言葉が見られるように、神宮との繋がり深い。しかしながら、神宮は神仏習合が極度に進んだ中世においても、僧尼拝所が設けられるなど僧尼の神域への参入を禁止し、仏教との混淆を極力避けてきた。

ところが鎌倉後期、最初の蒙古襲来（文永の役）をしのいだ翌年の建治元年（1275）、朝廷は「異国降伏」の為、神宮に密教系の祈祷所を建て、二百十六名の供僧と、六名の阿闍梨（密教秘法に通じた高僧）を置いた。

これが、いわゆる法楽舎である。法楽とは、読経や芸能を奉納して神仏を慰めると同時に、自分も無我の境に入って楽しむことを意味する。

このようにして鎌倉時代に建立され江戸時代末期まで存続した法楽舎は、内宮は神域の北西、宇治中之切町に、外宮は神域の西、八日市場町にあった世義寺境内に所在したと伝えられる。南北朝時代の制作とされる「伊勢両宮曼荼羅」にも、両宮の法楽舎が描かれておりその位置を確認することができる。

内宮法楽舎は、真言宗の寺（無本寺）で日照山法楽舎といい、行基菩薩、弘法大師の開山で、本尊は行基作の釈迦阿弥陀薬師三尊である。

明治元年に廃寺となったが、宇治中之切町お祓い町通りに「宇治法楽舎跡」の石碑が建っており故地を偲ぶことができる。

一方、外宮法楽舎は、世義寺が坂之世古（現在の神宮司庁山田工場一帯）に移建した際、境内に大法楽舎を設けてこれを智證院と称し、両大神宮の為に大般若経を輪読したり不断経を修めたりしたという。

これにより神の姿を現す事もあり「影向の間」と称する間もあったと伝えられる。

外宮^{みき}砌り於^ニ世義寺^ニ、建長七年十月ノ比、南都ノ上人アマタ、内外宮ノ為^ニ御法楽^ニ二千部ノ法花経ヲ転読セントシ侍ケルニ、…
『太神宮参詣記下十六』

さらには、『とはずがたり』巻四には、外宮において神前読経を志した筆者後深草院二条が、うちまかせての社などのやうに経を読む事は、宮の中にはなくて、法楽社といひて、宮の内より四五町退きたる所なれば、

として、外宮正宮から四～五町離れた法楽舎に向かったとある。

『伊勢市史』第二卷中世編より

また、毎年十一月の外宮の山宮祭の際には、世義寺山内に火を焚き火焰の上のを確認してから祭事を初めており、神宮から供養料も供えられていたという。

神仏混淆時代に寺院が神宮に深く関係していた状況が確認できる。

伊勢は古くから神が鎮まり、仏が宿る地とされてきた。
人々は、神や仏に出会いそして自らの心をつめてきた。
神と仏は水波の隔て—、水と波はただ形が異なるだけで元は同じである様に、神と仏の間に
隔たりは何もないのである。

榊葉に心をかけん木綿^{ゆふしで}垂て 思へば神も仏なりけり
西行

“朱夏”は、夏の異称。

中国の陰陽五行説では、夏を「火」と定めていて
火の持つ赤色や橙色を夏に配する事が根拠だという。

七月七日、赤く燃え上がる護摩の火は、人々の祈り—

七夕の空に舞い上がる炎に、願いを込めて—

爽やかな夏の風に吹かれる稲田に立つ護摩木を目にする頃、
伊勢にも本格的な夏が訪れる。

ふるさとの風 水無月

GOMASANN

世義寺 柴灯大護摩

—参考文献—

「伊勢市史 第2巻 中世編」 伊勢市／編集 伊勢市 L243/イ/2 P158～P184 (法楽舎からの視点)

「伊勢市史 第7巻 文化財編」 伊勢市／編 伊勢市 L243/イ/7 P168、P182、P185、P433

「伊勢市史 第8巻 民俗編」 伊勢市／編 伊勢市 L243/イ/8 P545～546

「伊勢志摩 第3巻 (第13号～第17号)」 伊勢志摩出版社 L240/イ/3 第14号P12

「伊勢志摩 第9巻 (第48号～第53号)」 伊勢志摩出版社 L240/イ/9 第50号P20

「伊勢神宮 悠久の歴史と祭り」(別冊太陽) 清水潔／監修 平凡社 L174/イ P48、P52

「伊勢の百話」 郡敏子／著 古川書店 L243/コ P67～

「伊勢の文学と歴史の散歩」 中川埤梵／著 古川書店 L902/ナ P30～31

「宇治郷之図」 伊勢文化会議所 L243/ウ 解説書P22 (法楽舎)

「宇治山田市史 下巻」 宇治山田市役所／編纂 宇治山田市役所 L243/ウ/2 P1040～

「お伊勢さんへの道」 伊勢志摩編集室／編集 伊勢文化会議所 L294/オ P25

「神と仏の道を歩く 神仏霊場巡拝の道公式ガイドブック」

神仏霊場会／編 集英社 175.9/カ P356

「検定お伊勢さん 公式テキストブック」

伊勢商工会議所／編 伊勢文化舎／編 伊勢商工会議所 L243/ケ P87 (法楽舎) P125

「西行 捨てて生きる」(別冊太陽) 平凡社 911.14/サ P89

「すぐわかる日本の仏教 歴史・人物・仏教体験」

大角修／著 東京美術 182.1/オ P46～47 P130～131 (護摩)

「図説伊勢神宮」 松平乗昌／編 河出書房新社 L174/ズ P86

「日本の仏教の事典 悟りと救いを導く法流の全系譜」 学研 182.1/ニ P82～、P92、P263 (護摩)

「三重四国八十八カ所霊場」 滝本昭二／編 三重四国八十八カ所霊場会 L180/ミ P196

「三重の祭 海に山に里に、神々つどう美し国」 伊勢志摩編集室 L386/ミ P66

「三重の歳時記」 中野イツ／著 光書房 L386/ナ/1 P90～